

CD 再生システムの系譜

1. はじめに

CD 再生については、マランツのユニバーサルプレイヤーDV-95 と SACD プレイヤーSA11-S2 や 47 研究所の CD トランスポート 4716 信楽と城下工業の CD トランスポート SWD-CT10、EK JAPAN の 876CD、CEC の携帯型 CD プレイヤーなども経験していますが、主流は 30 年来フィリップスのスイングアームメカの製品で推移してきており、最終的に GPS クロックを入力し、光城精工の仮想アース Crystal Ep をセットした EMT981 が生き残っています。

マランツ CD-95 PHILIPS LHH-300R BARCO EMT982

PHILIPS LHH-1000 BARCO EMT981

他方、外付けドライブと fidata HFAS1-S10 による再生や PANASONIC のブルーレイレコーダーDMR-UBZ1 でも CD 再生が可能です。

2. EMT981 の再生経路の変遷

上記 EMT981 については、下記のような再生経路の変遷をたどってきています。

- 1) デジタルバランス出力を変換コネクタで RCA デジタルアンバランスに変化し DAC-1 に入力
 - 2) デジタルバランス出力を GPS クロック入力した CRV-555 経由で BNC デジタルアンバランスに変え DAC-1 に入力
 - 3) アナログバランス出力を SAEC の長尺バランスケーブルで出力
- 今回、位相反転を容易にするために FIDELIX の TruPhase を追加導入し、次のような再生経路にしました。
- 4) アナログバランス出力に TruPhase を介在させ、SAEC のケーブル 2 本でバランス出力

さらに、TruPhase が介在したことにより、バランスアナログアキュライザーだけでも接続可能になりましたので、次の報告のようにバランスアナログアキュライザーと XLR リベラメンテを追加導入しました。

TruPhase の追加導入(8)

- 5) アナログバランス出力に TruPhase を介在させ、バランスアナログアキュライザー→TruPhase→XLR リベラメンテ経由でバランス出力
- すなわち、インフラノイズ製品のみでバランス出力できるようにしたわけで、しかもパワーアンプまで全経路バランス接続となりました。
- なお、今回導入したバランスアナログアキュライザーと XLR リベラメンテは基本

仕様の変更はありませんが、追加のチューニング（メーカーは WTP : Well-tempered と呼称）を施したとのことです。

このような経過を辿ったことで、演奏会で聴いてきた演奏の最新録音の CD は、眼前に演奏家が演奏しているかのようなリアリティを感じさせてくれました。

他方、昔のアナログマスター時代からの CD も音質的にも録音の古さを感じさせず、アナログマスター由来のアナログ的な雰囲気を引き継いでいます。加えて、必要に応じて位相反転させたときの変化も感じ取りやすくなっています。

このように随分と回り道をしましたが、到達点として、EMT981 本来のポテンシャルを活かすバランス接続の効果とそれを支援するケーブルとアクセサリーの重要性を改めて認識できました。

3. メディアドライブと fidata HFAS1-S10 による CD 再生

PC 用メディアドライブから CD を読み出すことは、PC とのコンビで始まり、ネットワークサーバー fidata HFAS1-S10 導入後は、PC 用ドライブから CD を読み出して DAC に送り出すことを続けてきました。

今回、次の報告のとおり、メディアドライブとして fidata HFAD10-UBX を導入し、fidata HFAS1-S10 と組み合わせて CD 再生を実施できるようにしました。

[fidata HFAD10-UBX の導入\(1\)](#)

その結果、これまでの HFAS1-S10 と PC 用ドライブとの組み合わせによる CD 再生と一線を画すものとなりました。さらに MQA-CD も再生可能です。なお、アナログマスター時代からの CD や MQA-CD では、DAC 側での位相反転により、音の焦点があって定位も明瞭になるメリットがあります。

また、HFAD10-UBX は PC との組み合わせで、PC 側の再生ソフトの選択により CD の他、DVD、BD の再生も可能であり、再生対象が広がりました。

以上